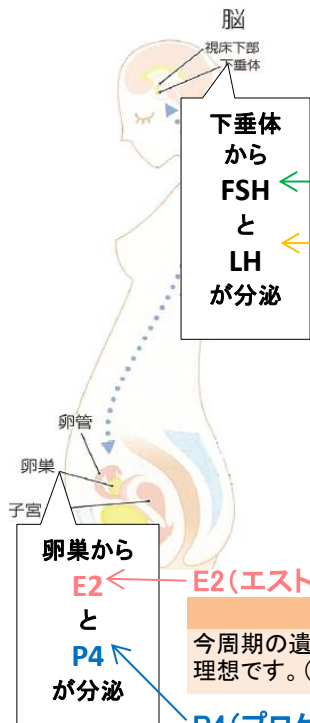


# ホルモン検査の説明



**FSH(卵胞刺激ホルモン)** と **LH(黄体化ホルモン)** は卵巣を刺激し排卵(卵子の発育)を促すホルモンです。

採血目的	FSHとLHを測定することにより、卵巣の予備能力を始め、卵胞の発育や卵子の質、黄体の活性化の指標となります。
時期	FSHとLHの測定は月経2～5日目が安定しており採血により判定します。
評価	この時期は、FSHの値がLHより高いのが理想的で、FSHとLHの比が2:1 あるいは 3:1 ぐらいが良い排卵に結び付くと考えられています。

case① **LH > FSH**  
この比が逆転し、LHがFSHより多く分泌されると、排卵が止まったり、卵子の質が低下し妊娠は困難になります。代表的な疾患として、多くの卵巣性卵巣(PCOS)があります。

case② **FSHの値が10以上**  
FSHの値は卵巣の卵子を育てる指標＝卵巣の予備能力の指標であり、3～9mIU/Lが望ましく、10mIU/L以上では卵子の発育が障害される可能性があり、15mIU/L以上では自然排卵は難しくなります。なぜ、FSHが上昇するかというと、卵巣の能力が低下すると脳下垂体が「卵巣働け！」と卵巣への刺激を増強させるためです。

**E2(エストラジオール)** は卵胞成熟の指標となるため採血の測定により卵の成熟度がわかります。

月経2～5日目に採血する場合  
今周期の遺残卵胞の有無や卵の質を推定するのに役立ちます。30～60pg/mlが理想です。(前周期ホルモン剤使用の場合には低下します)

排卵前に採血する場合  
排卵直前の値は、卵胞1つあたり250pg/ml～300pg/ml以上が理想です。

**P4(プロゲステロン)** は黄体状況を確認する指標となります。

排卵直後に採血する場合  
排卵したかどうかの確認目的で行われ、3pg/ml以上が理想です。

排卵の4日目に以降に採血する場合  
10pg/ml以上が理想です。